



「地政学」の現在
—哲学京都学派と東亜共栄圏

政治地理学入門—実践編（後期）
第1日 第2回

哲学京都学派

- ・西田幾多郎（1870～1945年）
- ・日本を代表する哲学者、宗教思想家、京都帝国大学哲学講座教授
- ・純粋理論と実在をテーマとする『善の研究』で西洋哲学と東洋思想との融合を目指す。
- ・田邊元らと哲学京都学派形成
- ・弟子に西谷啓治・高坂正顕・高山岩男・鈴木成高（京都学派四天王）ら



2

京都学派四天王の動向

- ・「世界史の哲学」
 - ・1942～43年に連載された『中央公論』誌上の座談会「世界史的立場と日本」に出席し、大東亜戦争を思想的に位置づけようとした
 - ・西歐近代主義と植民地主義を批判し、各国家民族の伝統の多元的並存という具体的世界史に基づき国家民族（日本）の使命を考察（後述）
 - ・特に高山岩男が提唱
- ・「近代の超克」
 - ・1943年に文芸誌『文学界』の特集記事、1942年に開催されたシンポジウム「知的協力会議」のテーマ
 - ・明治以降の日本の近代化過程において絶大な影響力を持った西洋を総括し、それをいかに超克するかを知識人や評論家が討論
 - ・西谷啓治と鈴木成高が参加
- ・陸軍よりもリベラルとされた海軍に接近
 - ・東条内閣や陸軍に批判的であったとされる

3

「世界新秩序の原理」を読む（1）

- ・国策研究会が西田に依頼した講演内容とその付記
 - ・国策研究会は1933年に設立された民間の政策研究団体
 - ・1942年から大東亜共栄圏の具体的構想に取り組む。
 - ・依頼者は陸軍軍務局長（当時）の佐藤賢とされ、東条英機の大東亜共栄圏構想に関する演説の参考として1943年に軍部（陸軍？）に提出される。
 - ・演説には利用されずも、1944年に公にしている。
- ・基本的特徴
 - ・短文ながらもかなり難解、「世界史の哲学」に関する理解が必須（政策応用が不可能）
 - ・（西田哲学の）天皇制や皇道との関係についても注意が必要
 - ・小牧一派の地政学と異なり、時間と空間を軸に一種の世界秩序を構想。
 - ・軍部に批判的であった哲学者の政治（帝国主義と民族主義）への接近を批判する論考とともに多元的世界観（ポストモダニティ）の提示として評価する論考がある。

4

「世界新秩序の原理」を読む（2）

- ・世界はそれぞれの時代にそれぞれの課題を有し、その解決を求めて、時代から時代へと動いて行く。
 - ・十八世紀ヨーロッパは個人的自覚の時代、個人主義・自由主義の時代
 - ・十九世紀は国家的自覚の時代、帝国主義の時代
 - ・同時に階級闘争、共産主義の時代であり、十八世紀の個人的自覚による抽象的世界理念の思想による反抗
- ・今日の世界は、私は世界的自覚の時代と考える。各国家は各自世界的使命を自覚することによって一つの世界史的世界即ち世界的世界を構成せなければならぬ。
 - ・今日の歴史的課題
 - ・第一次大戦の時から世界は此の段階に入ったが、古き抽象的世界理念（民族自決主義）の外、何等の新しい世界構成の原理は生まれず
 - ・現実の歴史的課題の解決の不可能なことは、今日の世界大戦が証明

5

「世界新秩序の原理」を読む（3）

- ・「世界史的世界」、「世界的世界」とは？
 - ・いずれの国家民族も、それぞれの歴史的地盤に成立し、それぞれの世界史的使命を有する
 - ・そこに各国家民族が各自の歴史的生命を有する
 - ・各国家民族が自己に即しながら自己を越えて一つの世界的世界を構成する
 - ・各自自己を越えて、それぞれの地域伝統に従って、先ず一つの特殊的世界を構成することでなければならない＝西洋世界に対する非西洋世界の確立
 - ・斯く歴史的地盤から構成せられた特殊的世界が結合して、全世界が一つの世界的世界に構成せられる
 - ・これは人間の歴史的發展の終極の理念
 - ・今日の世界大戦によって要求せられる世界新秩序の原理でなければならない
- ・「世界新秩序の原理」とは
 - ・我國の八紘為宇の理念が体现
 - ・「万邦をしてその所を得せしめる」（日本國、獨逸國及伊太利國間三國條約締結二開スル詔書、1940年）

6

「世界新秩序の原理」を読む（4）

- ・ **東亜共栄圏**の原理
 - ・ 東亜民族は、ヨーロッパ民族の帝国主義の為に、圧迫せられ、各自の世界史的使命を奪われていた。
 - ・ 東亜の諸民族は世界史的使命を自覚し、各自自己を越えて一つの特殊的世界を構成し、以て東亜民族の世界史的使命を遂行せなければならない
 - ・ 我々 **東亜民族**は一緒に**東亜文化の理念**を掲げて、世界史的に奮起せなければならない
- ・ 一つの特殊的世界が構成せられるには、その中心となつて、その課題を担うものが必要
 - ・ 今日それは**我日本の外にない**。
 - ・ 東亜戦争における日本の勝利は世界史の方向性を左右する、と示唆

7

「世界新秩序の原理」を読む（5）

- ・ **日本の国体と皇室の役割**
 - ・ **世界的道義**は（キリスト教や古代中国の王道ではなく）各国家民族が自己を越えて一つの**世界的世界を形成**すると云うこと
 - ・ **日本の国体（国家体制の正統性）**
 - ・ 皇室は過去未来を包む絶対現在として、皇室が我々の世界の始であり終
 - ・ 皇室を中心として一つの**歴史的世界を形成**した所に、万世一系の我国体の精華がある
 - ・ 皇室は一つの**民族的国家的中心**であるのみならず、皇道（天皇が行う政治の道）に**八紘為宇の世界形成の原理**が含まれる
- ・ **世界的世界形成の原理と各国家民族の独自性との関係**
 - ・ 各国家民族の独自性を否定することではなく、正にその逆
 - ・ 世界が**異体的に**一となると云うことは各国家民族が何処までもそれぞれの歴史的生命に生きることでなければならない＝**個性的統一**
 - ・ かかる多と一との媒介として、**共栄圏**という**特殊的世界**が要求せられる

8

「世界新秩序の原理」を読む（6）

- ・ **歴史的世界形成**には、**民族と云うものが中心とならなければならない**
 - ・ 世界形成の原動力
- ・ 共栄圏の中心となる民族が、国際連盟のように、抽象的に選出されるのではなく、**歴史的に形成**されなければならない
- ・ 世界性を含まない民族自己主義から出て来るものは**侵略主義**や**帝国主義**（英米）
- ・ ある民族が自己自身の中に**世界的世界形成の原理**を含むことによって**真の国家**となり、それが**道徳の根源**となる
 - ・ 個人は、この意味で**国家の一員として、道徳的使命を有する**
 - ・ 世界的世界形成主義に於ては、各の個人は、唯一なる**歴史的場所**、時に於て、**自己の使命と責務**を有する
 - ・ 日本人は、日本人として、此の日本歴史的現実に於て、即ち今日の時局に於て、唯一なる**自己の道徳的使命と責務**を有する
 - ・ **指導民族**と云うものが選出せられるのではなく、**世界的世界形成の原理**によって生れ出る

9

「世界新秩序の原理」を読む（7）

- ・ **神皇正統記**が大日本者神国なり、異朝には其たぐいなしという**我国の国体**には、**絶対の歴史的世界性**が含まれて居るのである。
 - ・ 我皇室が万世一系として永遠の過去から永遠の未来へと云うことは、単に直線的と云うことではなく、**永遠の今（絶対的現在）**として、何処までも我々の始であり終である
 - ・ 八紘為宇の**世界的世界形成の原理**は内に於て君臣一体、万民翼賛（一種の家族主義）の原理である。
 - ・ **内なるものが外であり、外なるものが内である**（日本精神の真髓）
 - ・ 我国の国体の精華が右の如くなるを以て、世界的世界形成主義とは、我国家の主体性を失うことではない。
 - ・ 己を空ろして他を包む**我国特有の主体的原理**
 - ・ 之によって立つことは、**我国体の精華**を世界に発揮すること
 - ・ 今日の世界史的課題の解決が**我国体の原理**から与えられる

10

【論点】 「世界新秩序の原理」をどう評価するか？

- ・ もう一つの**帝国主義**？
- ・ 近代を超えた（ポストモダンな）**文化多元主義**？
- ・ 日本地政学をこうした思潮から再検討してみる

11

日本地政学研究からの評価（1）

- ・ 柴田陽一（2016）『**帝国日本と地政学**』清文堂
 - ・ 膨大な史料の収集と渉猟から京都帝国大学地理学教室教授小牧実繁グループの「日本地政学」の実践性を評価
 - ・ 2017年に人文地理学会賞受賞
 - ・ 書評は山崎（2017a）『史林』100-5ほか



12

日本地政学研究からの評価 (2)

- ・ 山崎 (2017a)
 - ・ 「日本地政学」の倫理的両義性については、日本の地政学を、西洋諸国が展開する帝国主義的世界秩序へのオルタナティブとして、その問題性を認識したうえで、評価しようという主張がある
- ・ 佐藤健「日本における地政学思想の展開—戦前地政学に見る萌芽と危険性」北大法学研究科シユニアリサーチ・ジャーナル11巻、2005年、127頁
 - ・ 小牧らの「日本地政学」の目的は、西洋諸科学による世界像の歪曲を正すこと。
 - ・ 「反西洋世界観から生み出される西洋秩序への批判なのであり、皇道という曖昧なユートピア像に代替された新たな世界観を核とし、地誌研究による「本然の姿」の究明という方法論を用いることで多元的世界観に色づけされた、日本の利益を優先させる新秩序の模索であった」
 - ・ つまり佐藤は「日本地政学」を「近代主義的世界観への批判の先駆」として評価しつつ、「結局はウルトラ・ナショナリズムと恣意性に彩られた彼らのための「科学」の推進にすぎなかった」と結論づける

日本地政学研究からの評価 (3)

- ・ 山崎 (2017a)
- ・ 柴田 (2016)
 - ・ 日本の主体性を明確にし、「その存在そのものが近代ヨーロッパ批判・植民地主義批判たり得ていた」とし、「当時日本に存在した他の地政学とは異なり、人間の意志や精神や感情の領域まで足を踏み入れようとする性格を有し」、「それ自体は人間精神の重視と解することもでき、一概に否定されるものではない」と評価
 - ・ それが日本の絶対性を確信するあまり、日本の行為を相対化する視点を欠いたとしつつも、「終戦による地政学の断絶」(戦後、地理学研究における主体性の議論を回避させた)一因となったとする。
 - ・ 確かに帝国主義国家ごとに構想された多様な地政学には多元的世界が含意されている。
 - ・ しかし、日本が主導した「共栄圏」には、そのような多元的世界は実現されなかった。帝国主義国家の対立の中で立ち上がる国家や帝国が、その内部領域においても多元的世界の原理を貫徹することは困難で、内部統合強化のための社会的文化的一元化の力が働くことは歴史が証明している。
 - ・ 西田の「世界新秩序の原理」ほどに「秩序の構想」足りたか？

日本地政学研究からの評価 (4)

- ・ 山崎 (2017a)
 - ・ 柴田 (2016) に沿うならば、小牧グループの一連の著作は「無自覚な一元論」、「実証性の欠如」、「日本の優越感に基づく独善的記述」としてほとんど評価されない
 - ・ これが事実であれば「日本地政学」とは新世界秩序構築への構想としてはおよそ論理性や実効性を備えていなかったことになる。
 - ・ その一方で、柴田 (2016) は小牧のプロパガンダ活動の組織的個性、提示した地政学的世界観の独自性、地理学による社会的実践への参与といった点を評価している。
- ・ やはり、西田が提示したような世界観を同時代的にも、今日的にも考える必要がないのか？

日本地政学研究からの評価 (5)

- ・ 山崎 (2017b)
 - ・ 「地政学の相貌についての覚書」現代思想45-18
 - ・ こうした西田の世界秩序形成の構想は、歴史的固有性をもち複数の国民国家を地域的に統合し、さらには統一的(あるいは普遍的な)世界秩序のもとに置くという点で、今日の国際連合はじめ、ASEANやEUなどの地域統合の理念と似通っている。
 - ・ 異なるのは、そうした世界秩序形成は、欧米の帝国主義への抵抗であり、国家的・民族的平等ではなく、「皇道」に即した「八紘為宇の世界形成の原理」から日本によって主導されるとした点である。
 - ・ 文末で「我国の国体の精華が右の如くなるを以て、世界的世界形成主義とは、我国家の主体性を失うことではない。これこそ已を空する他を包む我国特有の主体的原理であると述べるが、「共栄圏」という地域統合を推進する主体として日本を位置づけるからこそ、国家主体性を失うことがないと言いつたのである。
 - ・ その意味で、西田がいう「特殊的世界」の構築もまた一つの帝国主義であったのである。

東亜共栄圏とスケールのゲシュタルト

- ・ 山崎 (2017b)
 - ・ 帝国主義国家の対立の中で立ち上がる国家や帝国が、その内部領域においても多元的世界の原理を徹底することは困難。内部統合強化のための社会的文化的一元化(つまり、総力戦体制や全体主義)の力が働く
 - ・ 「日本地政学」もまた、実践における偶発的な「光と影」の並存(柴田2016)ではなく、外には世界の多元化の、内には植民地支配という一元化のペクトルを不可避的に内包
 - ・ この両義性は、経済地理学者—ルースのいう「スケールのゲシュタルト」、つまり重層化したいずれの空間スケールを見るかで地政学の相貌(見方)が反転するということ。
 - ・ Smith, N. (2004) Scale, Bending and the Fate of the National. In Eric Sheppard, E. and McMaster, R.B. (eds) *Scale and Geographic Inquiry: Nature, Society, and Method*, p. 195, Blackwell.
 - ・ 久武 (2000) は、「日本地政学」におけるハワイの見方に、米国による先住民排除と植民地化を批判し、植民地化以前の「本然の姿」への回復を主張しながら、ハワイへの日本人移民の促進と日本による植民地化を構想するという、総論論理の反転がある」と指摘
 - ・ 久武哲也 (2000) 「ハワイは小さな南州国—日本地政学の系譜(承前)」現代思想28-1、60-82頁

つまるところ…

- ・ 世界政治の倫理的両義性が**重層的な空間編成の構想や実践**と関わっていることを感じせず、特定の空間だけを切り取って、その良し悪しを議論してこなかったらどうか？
- ・ 昨今の地政学ブームの危うさ
 - ・ 国際関係の脅威・危機だけが強調されるが、その対策がもたらす国内社会への影響はどう評価されるのか？
 - ・ そうした影響を受けた国内社会は、どのような外交・安全保障政策を支持していくのか？
 - ・ 脅威の対象とされる中国も、古典地政学、あるいは西田流の「世界新秩序の原理」を標榜してこないか？
 - ・ そうした懸念が現実化しつつある中で、かつての地政学からどういった教訓を得られるのか？

